八丈濤浪

相模へ
976
6

門 遠13
號 976
巻 6

越後国 鹿谷 藤原

とく折オ仙ハ腹切るべし。稲荷山へ赴くべしとて。その日。その夜疾く。境内なりける。絆つてどろ小僧へ。仙ハ自殺せ。ハ十は墳の硯を取る。崇と生ひ。ひとを又彼家へ。さそうる。八貫目の銭を獲て。かくまでよ幾跡やる。凡夫盛なるべ出ふ。と世語ゆをいへど子共のうへ。中太郎が狂死。お駒ハ水練。そうとて吉祥なれば。一旦家の凋落。及びて。ひとを又子どもふ。ほき死ぬ。我ぞ。彦の崇。彼複。今ハ件の銭を数のごく。因果塚の家へ返さるべしとあるべうぞ。と只顧の弥念。ものこと。ほどふう。紙斧ふくと。説ちうし。翌つ。登山せんとて。准胝。紙をる。程よ。大八。鶴よ。ふ。向へ。火と。焼つ。尾花と。怒せ。彼と。此とよ。怒果さ。ひとを。居るどふ。ふく。遺蹟。最。と。豫てより。計技。ことを。才仙。ものを。自滅。どふ。謀。遂よ。ふるふ。

あるゝ山崇式おそれて。翌六尾山の麓へ戻さんといふて。先竟のうなを。
ゝまで斧を揮ひ。世を彼処へ起き。矢庭にあるゝ式穴へ突落し。
結果塚の鬼は崇神。ゝ斧式隕ぜ。といふと式は誰ゝ又ぶと斧式疑ふ
べし。とまでよまと捷径因。と縛十二分ふ伎価ゝる。糟て斧ゝ耳語くゝ。斧ゝ
大祭ふ欺びく。さて良人ゝ山ゝ。因果塚ゝその名ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
格ど。かゝる伎宜のなり。せび女子ゝ竟ゝ治ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
就て六丈八と俱ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
平ゝ疑ゝ。愉ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
擔せ。廻斧式ゝ。主後四人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
近く。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
八ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

後方より進ようとして。渚と投入るゝ。渚平ゝ背を。一當ふ。蹴落さんとするゝ。
惜て斧式礎と蹴ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
落丈八ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
つ。頭式岩ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。晩らど。頻ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
割紀と絡ゝ。麻索式穴ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。魔風吹ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
喘ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
丈の足式出せど。絶てゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

しかるに爺が匣の底より。彼等が密書を出しゝかば。好淫ともに發覚して。猪平六は驚き怒るとも死るものゝまへにいはひかく。しかれ亂れの三屋ふ。忽地節に癰いできて。苦しきこと逐に愈ず。果は癩風になりしかば。一旦ましくくてもおち。九月晦日の夜の大風雨に。難れ筏を推流されて銭百金の材木を失ひしかば。活業是より衰へて。くれぬべきに似るべきをあくまでもこれをうけて。舊悪を顧て。おし悔しくもやござと禅らうとして還るになりし孫が。利を骨と貪る皮と世残忍りしよりて。世の経営の懶さりき総て止るまで居るにけりける程に。尾花才三郎は痍負しる文を獲がたく。稲葉山へ赴きつ。守義龍に見参し。牧村長通がこのかたに因果塚の崇つげるよしを、わけ、彼硯を進らせしか。義龍耳を側て。殊更に驚嘆しかば。不祥の硯は前車の覆るを前にし。後車の為に誡ざらんや。こを徳高き法師に授て硯を舊の寺へ返しく。是を信ずるに且才他は先君に忠あるよしを云り。よく言せり。今悪人の崇によりて。みづから刃に死ぬ程取らず。ぞをを惜むべきことを返し。ふするその子才三郎が不破郡の目代となし。父の金瘡危くうたがふに旅館へ退りしく。療養を加へるとも。癒り御むつかしに。尾花親父は辱さる。感涙を拭ひあへず。その日より牧村が宿所へ退ぬるに。その癖才他は緯絶ぬ。才三郎は失怙の哀にたえず。せめくは人を走らして母に告妻に報し。先祖の墳墓に父の亡骸を葬つる。一圓不破の宿所にかへりて。喪に服して居る程に十月の中浣より尾花が家に物怪そとまく。夜をあかしく。梅と光が夫婦が枕上に立ちうば治駒へことに。魔れたるとぞ長く病著にぞ。以后なりとは疑ふべからずあらぬ。お駒が心まうへ。小桔梗才三郎は喪の中に一層の愁をつ。消息して牧村に告里へ相譚ひて。修験の行者を請來し。護摩の煙に物怪を

襁褓に念珠の音小怒吳の得脫を庶幾ちとども物怪遂に消散せざ活動
まもく病癒つかて今茲もとや暮まく同雲寒に黄昏小尾花が門に
立在く鉢をとて行僧あり。小桔梗へその声を聞て遠く門に出けるに
吳人の亡母ちん僧宿ねりなん。おろ〳〵こゝろ哀小今宵をあしのひ拾と
ゆ入まく吁嗟に管ねけに。當下才三郎へ行僧に對面。その為体を熟
視るに年ころ行ひ澄ませ道顔秀ちく凡ろ〳〵ぞまづその本貫法名氏
問べ行後若く貪道に的心と過まく東西のもの幼稚く母を喪ひ父に
別て嫂に養まく患難いべうとあ〳〵ぞ父乃存亡とちとんゐ當四に呻吟
つ人の小厮にかりて患難そぢ倍せり。あるを死故ありてこゝぞもきみに
造りまくる弾弦より事起まく主の一子命死隕ぬ〳〵ぞとまくまを死
殺とそあ〳〵後どいひとくよりれる吳まに施て河辺走去て方を投人〳〵

ちうる折一個の修験者。名を苦と来て推留め早りて可惜命死る失ひそ汝が主を
主ゆゑ即父の仇人へちゝぞ孝心死神明佛陀憐ぬひて雙死もくらせ
ちひ〳〵その布如此さと縛つぞ〳〵ふ説ちし汝過世ちう佛縁あり。出家
せば戦の人と清茂せんまづ〳〵ぬ来ちしといひをあくぞ。脆て小服ふ抱さて
空中小内死沖す。瞬の間に巻をちぬ深山のちく〳〵ぬちう〳〵迴そまじる祝髮
させく。兵式的心とひゆ死。ことよりして彼修験者。貪道死推乃て大凡國この
吳地名山到らざる所なく。その間まに名を清仏の法延伸ふく
聽衆の末座に処しめ〳〵後に三年ゆく。本地垂迹神道の伝授二乗三藏佛法の
妙奥服膺ちく。淵源と極めて加之。ゆ〳〵定に入ると死へ世人の過去未来劫
前身後身をちとい〳〵ぞ。彼ちく天機を漏さ死許さぞ。かく〳〵今茲
亡父の十七回忌に丁る死りて且く才の暇をとふて人間に〳〵ぞとちふに。師ふ

こゝろ智中にしく忘りく宜ふあり。汝が勤行既に熟せり。さはれ是より永く別るべし。さらば人界に立かへりて。因を説果を挟ぐ有縁のものを済度せよ。今はその時来れり。ときこえしと。いふぞと思へば夢はさめたり。貪道謹でうけたまはり。且年比の高恩を謝しまつり。抑これが師は神歟佛歟願くはしらしめ給へと叮嚀に請問に。師は莞尓とうち笑て。現形しておはしけるは是ぞ美濃の仲山なる。金山彦大神の使者なる。飛天夜叉なり。以南宮房が石詹にありし嚢に汝を救ひしも。その孝心を憐み給ふ神勅を受て。ゆゑ守義孤に見参せず。如此ことまうせしで餞別をまゐらせて被物を。あるとしまへ合渡林なる父が墓のほとりに立り。廼七月流経して叮嚀に菩提を吊ひなば彼此を恭縁して。今この門に乞食をまでは心入とて數行の涙をこぼし乃歎しさふ。これが一人匿さずと告るとく。長拍ぐろりふあり小枕といよあらず小桔梗は小膝をたゝめ。耳を側て才三郎はこの怪談を半は信ど半は疑ひ。忽地ふ云ようこの物

侍は豫て知のごとく。諸平が男児狂死せしと、ゑ逐電なしたる小厮ならんと大く猜されけれ卒尓に是を尋ず。石禾山の硯乃なり。又才佐が自殺のをり。活駒が病着ぬ駒が怨念なるかもしれなしと是を告。則加持を請ひしかば的心微笑因果の締の糸の中に二条を生るが如し。囹圄の中に入るときは誰もよく脱るべし。但疾なく顕る物怪は真の怨念にあらず。疑心暗鬼を生するといふなり。然りとはいへ招くのみあらず通夜して退治しまへ。これが加持祈法をまゐらせん。真偽立地にわかるべしとかいふ程にはや二更の鐘なりければ。小桔梗は客房に卧蓐を備て。的心を睡らせ。その身は活駒が枕方にありて看病をさる程に才三郎は活駒が病牀に隣れる。便室にひとり座りて。短鎗の鞘を抜てかけ置きて。肘近なる壁に掛け。燈の下に韜畧の書をとりいだしとこの夜はところ読書にありしかど更闌て寃鬼の出る遅しと俟ゐたるべし。不題復塚なる岐蘇は是しはらくをきて活駒を救ひて既にあわを

遂しかバ女房溷水が往方を索ねど世業をも手に着で只虚々と日を送りけり。一郷の荘客們識ざるものもなく憎ざるものもあらねど。母親間柴が溺倹のみ。亘りぬ。ここに致仕と時は師走の下旬になりて。一夕間柴ホが事よりけん。荘客們侯つけし某甲が宿所へ忍び入て溷水が為ゝ岐蘇が為に残此彼斉一告ゝ。従に外面猛に息劇しく犬山の敵推よせたりと郷村を放火さと罵る声ゝ。えて人衆東西へ逃迷へバ。衆皆ともに驚きて資材雑具を担出せど間柴も慌忙つゝ宿へ入りて。戸を群ざる人に誘引て往方を定めず走りけり。このとき岐蘇ハ離れず母親間柴がかゝりぬと夜に紛して胸うち騒ぎ。いまだ世ほしとぞ此件の騒動起りしかバ。驚き呆て既に卧房へ入りんとする。お駒が手を引き背門口より。両親捜して走るものぞ。お駒ハ才跳がそとしる。牧駒の縁衣ハひとつ被くるまゝ。帯さへ楚と結びあへず黒白もわかぬ甲夜闇に。喘々走りける。さてこの騒劇を後に聞けバ。犬山の軍兵よせ来つるにあらず。彼此の山賊ホがかくのごとく流言して。里人等を劫しざうに紛れて雑具を奪ひ。妍き女の子を掠めとらんと計りしかバ。山賊等ハ逃るを逐ふて引剥するなり。只筆の皮紙とるがごとし。この為に岐蘇等ハ途にいくそくの患難を又くく遍く脱れつ。お駒が疲労るとも脊小眉て。三時が間に六七里を走るともあらざ走りきて。元旦の月を見んや出るんとする比に。関が原のほとりなる桃配野を過るといへバ。闇けれバ何処と知るよしもあらざりし。この時一個の小賊松明ふりてらして逐蒐来つ。脱ずらうと見えしかバ岐蘇ハお駒を先へ走らして。背をでまもりつゝ防ぐ程に。お駒ハまたく驚き迷ひて。たゞるくと只ひとり。又五七町来めらんとするに月朧斜に昇りけり。浩処に。跫然と足音して。いと烈しく逐よるものあり。原来脱れし所の。とるにも胸の躍りつゝ走らんとするに足ハ

進まずどころまさく忙るゆぞ。その内の近く逐蒐すべく引とくんと走るべ。吐嗟と叫びて一丈あまり。走つ公弁式抜とりて打掛るべ忽地摧と倒る弦。えうを迸んとするやよ和尚と呼ぶ声ハ疑ふべうをあらぬ岐義こそいそもいふと慌忙き。走りつへりく引紀せど岐義ハ古駒よ弁式眉間へ走くう打込まく流る鮮血泉のごく忽地よ息絶えり。過失といひつべく。既よ夫を害せるべ脱ぐき道ハ色消すや哀ちやと声を限るよ活きどもそその甲斐のなりしべ。自害せでやとそふ拘うつ。かくまで罪障深き身の愚よ死人とりく沼死をどべ。そをと甲斐ろー。里へいあ紀く人よ告守の法則よ仕ぢんとそひくどど生恨よ涙よ途弦さうあくど。

爰路弦なるとこちつ里や近くうるまくふとうえきべ樹牆折繞らしる緒折戸のおとりふまるよう。裡よ燈火の新さーく人の咳く音ぜらべ弦よ扉を推とよ。音もせぐ風死ふう。この孤園ふして東向うる便室あり。縁新遣戸二三枚開ようそ。障子よ人の新ちうこ。ふてうぐうくうちうだちとおよど塔るゆ門難て。屋弦燭よ彼此を。熟視くえ死よ驚きあるる浅ま。野干玉のくらき夜よ。ふとをあらで走りーべ親里を言うるぬ。ふとくへが養親舊の夫の宿所といふひけど迷ひ入りて恥ー死。障子ようる人新ハオ三ぬ。ふやとちとちん仇ー丈ふ仇枕ろう果しるひざるを。えんくきるべ何とせん新護さと面るさよ。うち驚ぐ胃弦る死搭つ。ちー

きてんとちつきごと流石よそひ捨ぐくて樹立の蔭よ立駐りつ。かゝる夜よ
あらざりせば。彼ゆの面影。外るゝ〳〵あゝんやとてをかてを脱れぬ
罪障羽立ちとゝる命ぞ。ちくこの世のちひでよ。ひとめ〳〵んぐやと愛惜れ絆よ
狂ふ意の駒と裾よ襤褸の裂ち衣褄と揭く縁敷よ足掛てをまぐよ三色。
ちりつぐど登る在明の月を背よ彩を紀。障子のまろ〳〵ふ立在へ〳〵曉方の
陸の声。かくとつく寂莫ちろ。才三郎ハ信とえく。障子よりうる女の新
髪ふろ乱ゝく立ちふ正ゝく。お駒ろ寃鬼〳〵狐狸の正ゐるうゝぶ。刺留ざるとちふ
あらんで物ふんと壁よ掛ちる。傍紙ふちくと打揮ゝ。大唱一声障子な
蹴開き。逐入とちふ紙半ちをもさぐ。お駒が右の乳乃下ふ。蛭巻逼てぐさと
刺。ゝもとく苦と叫びつゝさと潰る鮮血を洒ゝ。倒もとかし棟の縁（穂頭あまりて
縋とちふ息ゝそぐよなりふワよ。才三郎ハ欣然と。刺留ゝる傍紙放さど。

知識の活劇一点遣ゝど。活駒を悩と妖怪へも駒が真の寃鬼ゐゝど。狐狸ハ変
化よ疑ひ臣。かぐろれ奴よゝど妻を悩さ見ーとそ安ゝ。本體紙ハ七ぐぐと
罵る声をいと尖く。抜ちふんとちる傍紙携ちぐゝく息紙吻。やよ祐の人才
三のゆ。ゝぐ月小川へ投ーゝど死ちちりひちひふんゲまで不思議よ存命ー。
そのちちふ紙今夫よ。言ると面ふ乳西乃ゐ。親よ堰ま一周川の早瀬の
水よ任ちる。月ハ復塚まぐ推流さちふ。ちふ紙地まぐ父ぶ使ひ。小厮岐義よ
放ちく。親里へハゐふちまぐ。情の械えちりけゝきく。否とちふ紙ハ稲荷の
住居ふ年ふまぐ。ひよ深ぬ妹使乃悪縁結ぐとちく。舎義ちて。ふまで
彼処ハ行ひ。鄰四の敵ゝちちふく。里人さちふ。ゝまぐ。ちふんもゝ文よ
扶掖ちく。往方定めぐ迷ひ出通宵走る途の艱難遂よ岐義よ引ちる。
文よ逐ま癖者の同近よ迫ゝび術ゐ。并紙打ちつ。忽地叫苦と倒ち

音小つまくバ無慙や仇うちて逐まりし八岐花さるが斧に額破られ。浅痍
ながらも己が所為なりけん墓がもと息ハ絶えつ。窓井夫ありとも妻を喚も痩人と
いへよふくろれあしじ惧ありとる夫を害せし。大罪かくぐ脱るゝれうず。犯人よ
告国の法則に任せんとぞひ定めつ。真夜中なるにさし昇る月ふ送られぞど
まゝやる養父の宿所障子にうつる人影ハ飽らぐ別まし才三のぬつ。人まくて
ぞと罪科を辱も忘まくて窓を登る。縁起ハ現剣の山夫殺し乃天罰ハ裙よ
襁褓の綴衣模様の駒の背に乗せられて。巨刃の謔の錆となる冥土乃
首途かくなるり。驛路の鈴の朦裡の聲消ぬハ後の悪名然不便とも迷て
一遍の回向然憑をなするといふ辰己と顔の色も忽地変りく倖然くら。
才三郎ハ忙然と会する途然枝とりく。原来ハお駒ハけつまでを存命て復
塚る。岐花とやらんに身を任し。そらくど犯せし罪の執着くらで今ぞ

鎗の石刺留るゝを不便うまといふ声併て母小桔梗ハよくと泣つゝ走る出紙
燭然揚て縁魃より。鮮血に塗れて倒まてる。お駒然見まバゆのくまくとも
るゝまさしいと惜さに返しやねと然繰返を涙まく手に乃滝れ糸今月紀斎ぞ
知らせる我浩然に樹播のおるゝま人のけらひしく。間柴ハ岐花然肩ぬかけて
縁起ちく進を入り。尾花ぬハまうまとべきを知り。吾倚ハ岐花が母親之七月の
下浣より長歳しく。お駒ぞのくる然ね老くぞそふやがまにいうりて世ぬの
瀉水ぶるてるりしる。岐花が正ろみのさへに里人ホが告る然ゆのく於。入来ぞふ
花が倒まてる然コんでく修浩るに。浅痍るまべきもなくて忽地に息かれりしらバ
織頃の騒劇に宿へ走くらざ逃去り。桃配野然るとされ道次よりこぶ手岐
総て肩に引かけつ。人家然ちぶ絡まく来る程に。己前より狼烈に立在てお駒娘の
今般の言れ学かくて袂を彼り辞り。己と商せ岐花ハ悉る我りの然夫殺しと

身を責らる心操して痛しけれ。今往方こそ定ざるなりけれ岐蘇にハ澳水といふ女房あり。親方の愛女の死を救ふハよりけれども。迹臭かりしの妹使の相譚良人といふ人ハ物体にて。許しをて亡骸に携りて著つ泣沈めバ岐蘇ハいとゞ面目なくて頭を低てつれなくり折てそありけれ白木屋猪平ハ樫の棒を被きつ。樹立の蔭より顕れ出て。そもそも尾花才三郎。ころが故主なる一角どのハ汝が父に闇撃せられ女児お駒ハ汝に殺さる。縁あるべしとハいへどひろけれど。夜るなくお駒が冤鬼の。こゝ頭に出ると世の風声紛るゝとを女児が面影。コ年くやしさに。十日あまり夜泊る毎に潜びへり。今見るお駒がまことの枉死果なる怨を記念せよと。敦圉猛く罵れバ。才三郎ハ少もあへず。ぬめくしやと刀を把て立向んとする丸に甲夜に宿匠行着的心。忽然と立出て庭へ閃りと。金驍鉄のて。勢ひ悍くふり揚る。諸平が棒を打落せバ撥る丸なりと信とらんて。それを謙松。汝ハ死るぞ在なる猪太郎が仇。お駒が仇人。孰も些を脱さじと罵つゝ狙ひて落ちてゐる棒を取らんとするふ手足動かじ。こはいかにと狼狽る目前へ再び数珠を閃して丁と礮と翳居に打居え人ハいぶかしと見かへれバ。和主が両個の子を殺せし和主が仏の剣なり。十七年さきつ比和主合浚の芝生ゆく。こが父を謀殺しゝこそ因果のはじめにてその子ともろ利ろるに。コれ家に仕ふべし。これもあらまし掛る罠なが子の命を絶しゝ人力人智の及ぶにあらじ。天の冥罰昭こゝり。これも善報あるのとろぐ。岐蘇が父復市ハ罪ありて獄屋に身まかり丈八が兄株蔵もおうもとぢて命を隕せし。縛みる和主が平初より起りし輪回応報脱るまじ和主ハこが父の後妻客に惑ひて女児を苦しめ株蔵が弟丈八に詭欺きて彼ホが死後まぐ。その姦淫を暁らせし刺お駒を復市が一子岐蘇ふ奪れしと云号せし。猶夫尾花生に殺されてこそ今生の業因のみ遠く前身を推とらん。

當初苦月角六が因果塚の鬼に祈て。彼一角を挙しに起り。牧村遣つ主君が
疎まれ柏芒寺の再興ざりしに事なりしかバ。塚の鬼時を得く
生を攀木破乃郡司が後家谷折へ。手口村の斧とかりたれ。谷折の二字が
引まくたりバ則。才ロの欠斤とかり。柏芒寺の悪僧午句坊ハ諸平が女児
駒となりぬ午と馬ハ和訓おなじ。午句の二字が合さるれバ則これ駒となる。
独孝子木二郎ハ才三郎に生を攀りぬるゆへ。そのあまたに木二郎ハ母を継父を
疎まれ。偷児に打拾て。あてなく親に捕られ。午句坊が邪慳乃刃に右の
腕を落されし。その形が象あり。木の字ハ右が打落して二郎の上に
冠されバ才三郎となるにあらずや。この故に午句坊なる。白木屋お駒ハ
才三郎が墓へどとねあれど。谷折の斧に憎まれて。且を患苦絶ざるに
斬岐施に犯されて夫を害せし罪人とられたり名告て木二郎なる才三
郎に移されしハ亦是前世の悪業によりたる人と念と疑ざ。謹で聴かせよ。
むかし柏芒寺に支山林中とい両個の沙弥ありけり林中ハ住持午句坊が
悪が翼支山ハさらく疎しが午句坊気疎くおもひて。竊に林中に相譚
て。支山がいたく酒に酔して。睡の中に縊殺させ機密が漏さるを恐て
又に林中をも殺さんとしたりしが。林中且く戦ふて午句坊に伎痩を負その
倒るがこまて死せりとおもひ直に逐電せしかども後道路に餓死せり。今
この因と縁をもて。支山の二字ハ岐蔵が岐となり。午句坊なるお駒を犯して。
女房沖水が打罵り。却お駒に額が破られ。忍かで倒されしがお駒ハこれが
死せりとおもひて。夫殺の罪人と名告りぬ。さ又林中の二タの水が中によりたる
沖水ハ支山の岐蔵と午句坊なる。お駒が為に狂死せしハ前身に支山を殺し
師の悪僧に傷けたる罪悪によるものなり。されバ間柴が拾ひし金ハ原是

的心
才三郎
諸平

因を推
果を説
大團圓
おとま

渚平が不正の財。今とは成りて復市が宛と貴ふに仏ごとぞ。畢竟敦が
故成りて恩義ある世婦成喪に是禍の水原。又この渚平が前身は柏芒寺に開
墓する。野上の拒君柏は又彩平卿に別成惜を恨怨て尼となりて伽藍の基成
開くまでを愛惜の雲霧晴まで。生を邪慾の渚平不業。かゝる渚平が因果
塚する。殘とゆくゆくゆく。一豆富る人とゆりしは原彼殘は柏芒寺の散物。成
ゆくゆくゆく。柏の一字成分まで是則白木。又彼主管丈は前生に妻谷
折と。午句坊に倒まする。白徒不破郡司。不破の不の字の右のくと。一へ冠まで
丈とする。八と破の字は声相近。ゆゑに前身に憑ゆゑ夫婦は則好夫と
ゆる。淫婦とゆて因果塚して自滅せり。成中谷折はその初成あるまで就中谷折はその
罪重と成りて又舊の穴へ尻と返せり。差丈悲しゆるゆゑに前身は彼柏
に又墓まで。驕て帰洛ゆゑ前囚司彩平。今渚ゆと成ゆゑ彩平の乳

母成薄金とゆゑ。又彼復市と株郷が前身は夏柿珠倉とゆる彩平卿の
老嘗に主の彩平が柏に。京洛に倶せとゆと仰し成手ひ練て留めしに柏に
この主後と。殊又に恋ゆゑ。ゆゑに又渚ゆ。この成湾に来て渚平に殺れ
獵夫復市株郷は疑まて狂死せり。ゆゑに件の柏に嫌まとする前身に怨は
ゆゑにゆゑひゆゑ。命成とは隕しゆゑ。彼彩平主後は成る隠慝ゆと
いへども。主は食言して。愛妾に和成せ。家臣は家初に練ずして。後に成
阻する。過失によりて彩のごとく。一婦人の怨とゆゑ。善は必善報あり。悪
は必悪報あり。小善成ゆゑに大に善報あり。小悪成ゆゑに大に十倍して
悪き報あり。生は世にくの如。ゆゑにそこを怪おそれ。只有ゆゑに孝子木二郎
前身の功徳によりて。才三郎と生変り。地方をお邑不破郡の目代とゆけあり。
お駒成退て。活駒を娶る。是塞翁が馬に斉。夫萬物は一馬の馬。馬の外に人に馬

かく。禍福は故より定主なし。善に禍を退け。善以福を迎ふ。又何ぞ疑ん。只才作の自殺の事因縁なきに似たりといへども又縁故あり。當初若月角六は因果塚の鬼に媚牧村衛門か事を欲悪り。畏すくりして塚の鬼。牧村生を怨しかども遂にその従を得ず。かくてその子婿才作が因果塚の祈子なる。一角を撃に及びて忽地に退攘し。お駒を拾てとなるに因果塚の坎へ落しは。みなかの鬼の崇なるが。才作は勇義の𠍱雄なれどもこの時いまだ死に至らず。只彼硯を愛せしより。遂に崇に命を隕せし。尾花は則芒なり。柏の白木と怨を結びし。又柏芒寺の因果又かくのごとし。數百年前死しるものの又人の胎に宿りて。おのおの生きたるの理は仏説の前後身俗に所謂再来は必因あり縁あればなり。生るるも類あり。善悪応報おのづから。古人に暗合することあり。牝馬お駒が生まれてより。嘗て披ざりしは前生女犯戒を破てゐるものは。するそくなるその党より出しる虫は蜻蛉のごとく。亦是真の蜻蛉によく似たり。譬ば件の塚の鬼手句坊谷折ホと。今のお駒谷ホも同根分身なりといへども更に因果なる説をなさば。すべて暗合するが如し。かくいはばお駒が亡骸を。彼窖へ返し埋ば怨霊ここに得脱して。永く障碍あるべくもあらず。これは不思議に三年以来台譖なる師の教を受たり。如是我聞静に胸裡乃月をとらんとすれば。影しく今生後生を照らしも。這個乃因果件の如し。亦複約ていはばとき説いくばく。

第一 白木諸平が 前身は 美濃尾山柏芒寺開基女僧柏手

第二 手口諜介が 前身は 美濃前国司在原行平小名落金

第三 猟夫復市が 前身は 在原行平卿家臣夏柿某

第四 猟夫株藏が 前身は 在原行平卿家臣珠倉某

第五 手口斧が 前身は 不破郡司鬼妻谷折

第六　主管丈八が　前身は　不破郡司
第七　小厮岐藏が　前身は　柏芒寺沙弥支山
第八　岐藏が妻澳水が　前身は　柏芒寺沙弥林中
第九　白木屋阿駒が　前身は　柏芒寺悪僧千句坊
第十　尾花才三郎が　前身は　孝子木二郎

もゝ〻〻との十人は十悪の貴主なり。或は餓鬼畜生となり。或は修羅人天に流轉せり。ことゝゝぞこの。没して生く没して返る。努慎めよと返覆〻〻。叮嚀に説喩せば尾花親子岐藏親子は醉ぎて。酹るぎて。もろ共に嗟嘆く感涙坐に禁あくまで。當下清平は圓るる。目玖揭赤めく鼻うちうゝ善知識の説法に。ものごゝろの穢汚を洗ま。はゞめく覚る二世の悪業。そまてまれ入らん為ど尾花ぬ乃。恩玖おりつぞとり復せ。女児お駒が今とゝぐ。殺さまてるを天の責渫拉法師

岐藏が為ふ。ゝゝを親の仇人ゝゝまと。ゝく首玖拳落ゝく。孝養ふ協ゝてよと。いひつ坐玖組合堂ゝゝゝゝ的心法衣の袖ゝ死あゝ世善哉ゝ懺悔に五逆十悪を消滅ゝゝ。ゝゝゝゝ岐藏が為に。和殿は假ふを主ゝるふ仇ゝりそて。いつで殺べき。今恩玖ゝく怨ゝよゝくまゝ。ゝゝ只は守に生ゝえあゝて命ゝゝく。ゝゝゝゝゝゝ玖菩提の種ゝく来世の経管肝要ゝゝと。ゝゝゝゝ示を折奥のくゝゝの。活駒は遠く走り出ゝとゝ死出法の声と。彼処に聴ゝまゝゝて病著忍地ゝこゝゝぬと。ゝゝ声を混回陽の推開ゝゝの折戸口守乃ゝゝゝゝ。ゝゝと牧村長通に呼門ゼ。右近大夫義龍は後者駆ゝくゝゝゝゝ入ゝゝ。ゝく出迎ゝ。才三郎玖ゝゝく。ゝゝ甲夜に羽栗の農民を劫き。山賊ゝ退治の為に。ゝゝゝ馬玖出ゝく。ゝゝゝ仏ぬ盗賊と。彼此ゝく搦捕ゝゝ。ゝ民を喻ゝく。ゝゝ折一個の修験者途にあゝく。ゝゝ馬を推ゝ。守ゝゝ

ありつめさぶや。前圀司。時頼藝の屋敷。法師よりて的心といふ。今夜尾花太
三郎が宿所よりあり。直ちに来たく對面ありつ。必圀司福あらんと告るとこそ
忽然と形ハ消くるくなりぬ。緯奇異ありとて据ありつ。うちを止ぶらつ
ありつ。孫ぶ。豊ぶ。武ひれくくく。ろ門傍に馳来つ。緯の数ぶらり小作りつ。現
ろの法師の智恵活動ぶ。一の行基弘法ぶ。さくく劣ぶうをあらぶ。旦ぶ
総角の比丘系也。頼藝朝臣よりく肖ろ。彼的心やあくんぶらんと図とて
的心礼儀正しく。貪道則時が児ろ。ろぶ母ハそのすぶめ。頼藝の妾ろき。
懐胎く。総のあ足処に農夫渫ぬ帰く後。貪道武産とぶ母さんすく
分まりぬとぶ。こと武ありよりろ。台詹師の海よりて。不思議実の
又とありろ。加之頼藝ハ陸奥よりく卒去ぶ。送骨式歛めをつけとぶ。
迺汝よりとぶ。此度ぶ師の賜ぶ。白骨ハ陀袋の裡に義てひと来ぶ

る式ぬのぶ。義龍ハ床ぶとたゆまとく。恭しく答礼。時殿ハむくろ。當圀の
守護ろとぶ。武運ぶ。傾て。子孫沈滅くのふと。戦圀の慣ひ是非ぶ
及ぶ。縦ぶ又道三ハ情ろくこと武逐ふとと。十八郡ハ彼ぬの賜なりぬ。ぶ
舊恩武仇ぶとべき。今ろ還俗ありぶ。冨田の城と進らとべ。と叮嚀ぶ
勧とぶ。的心ぶ式ぶ。掉く。時が子孫ハこと。ぶ不近圀ぶありと
仇のべ後又必起るのぶ。還俗のふハ本意ぶ。と回答ひひく
こと式許容。猛ぶ稲荷山の硯を取ぶ。こと武的心ぶ委仕ぶ。主従
帰城ありけるぶ。ぶ的心ハ件の硯とお駒が死骸を尾山の宮ぶ送

再び塚式築せざど。別に墳墓の地を擇て。賴勢の白骨を埋葬し。三世乃父母。有縁の亡者の為に石塔供を建立し。大施餓鬼を興行して。永くその菩提を吊ひぬるとう先岐義親子ハ出家ちて的心の寺子となりつ。白木屋渚吏資財を散し。貧人を賑し。市鄙を毀て的心の菴室式修理ひ補て剃髪ちて。的心式師と事る。癩風頓に平愈せり。かる奇特。まもなく煩悩の垢を洗ひ流し。ときく尾花が安不式訪ひ訪を過ぎくこの扨絡に。莫逆の友ふぞうろぬ。こをとよろこく好事のため。堰橋の一名式。和睦橋と喚做ろ。

このち縣の手式経て。武義のくふをこをとて仏ぐる物語ありて。そを式ば安永四年の秋昔八丈とふ義太夫曲に仏りしくば。世俗をとさく。ちるめをど。吳清ゆをかる奇談ありとふ人ハ。をとをそ云同も質ぞ。墓の走まふ書ちるーん。かくて的心法師ハ。済度の慈雲。四中に蔭注て。良賊合仰せざるくうく。尾花才三郎ハ女房活駒に子ども鞠産して。子孫めでて栄と。祝ひ仏ぐとうん。

○仏者が家傳の神女湯ハ。第一ちのみち妙薬。婦人渚病乃良剤ろ。并に精製極品の奇應丸○つぐむの妙薬ホ功能薬料取次所まで因に第四の巻に書載ぬ。ひろめして年数を重ね。功能板看掌ろ。ゆく。俗に繁昌仕ぬ。鈴ーさ式ヤーんとてかくうん。

江戸元飯田町中坂下南側四方みを店 瀧澤欽白

馬琴画賛の扇

江戸神田通濶町 柏屋半藏
大坂心斎橋筋唐物町 河内屋太助方あり

この序かるとさへに。ひろうとちするくいと鳴乎ぐまるに。西ろ。ぞ宿ぬ。
仏ぐとさるとうちちみちうまぐぞとあるぐちくの。いとようて例のとぐとく。
まくくとろまうとろとうそ

美濃舊衣八丈綺談巻之五終

編述　曲亭主人稿本

總巻浄書　千形仲道謄寫

畫工　北嵩重宣筆

繡像剖劚　朝倉伊八郎刊

○近刻出像國字小説全本五巻　山青堂開版

義男の名氏ハ渡辺橋の由来　馬琴著

袈裟御前七條法語

節婦の終焉ハ鯉塚の縁起

この稗史抜萃の形式趣向ハ至い来甲戌の冬江戸返賣之

越州文庫

前北齋爲一画狂老人畫圖

新編繪本　漢楚軍談

全部四十巻　近刻

蓬廬青々山人著

俳家奇人談

前後六巻　出来

蕙齋紹眞臨圖

天保十二辛丑孟春新刻

大阪心齋橋通博勞町

書林　河内屋茂兵衛

江戸大傳馬町二丁目

丁子屋平兵衛